
アニメ転生『ギルティクラウン』

雨月 夜葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメ転生『ギルティクラウン』

【NNコード】

N9946Y

【作者名】

雨月 夜葉

【あらすじ】

アニメのギルティクラウンの世界に転生した主人公が頑張って生きる話し

チート仕様です。

転生の前（前書き）

テスト期間、だけど関係ねえギルクラ初投稿です。

転生の前

僕は、ギルティクラウンを見て思つた。

何が起きても動じない心が欲しかつた。

だが僕は、あまりにも平凡である。事故から家族を守れなかつた人間……

何故、自分は、動かなかつただろうか？

一つ下の妹は、助かつた僕に「助けて」と言つた。
僕は、ただ音を拾わぬように耳を手で覆つた。

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない
聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！……

誰でもいい誰でもいいから僕をたすけてよ！

ただふさぎ込む。

守れない思いだけじゃ守れない

夢に出てくるんだ。妹が僕に『嘘つき』と血を流し語る姿を見て僕は、再び耳を閉じる。

その男の名前は、『ユーリ』ただそれだけ…家族は、いないいや、

殺してしまった。

死のう…死ねば楽になるはずだ。

自分で自分の首をベルトで縛つた。

「グツ…」

変な奇声が出て氣付くとベッドで泣いていた。死ぬ勇気が無い。いや、死にたくない。

PPP PPP !

メールがケータイに入った。普段見ないケータイをたまたま開ぐと

『ワシに会つて見よ。世界が変わるはずだ。君には、新しい器が必要だね。』

「ハツ！此処は、いつたい？」

「気付いたかね。ワシは、君達で言つ神様じゃ」

「…………」

神様：信じられない普通ならだがこの空間自体ありえない。これは、充分神様と言う証明になつていてる。

「神様がこんな人殺しになんのようですか？」

「君の家族に頼まれてな…君を救つてくれと」

思わずボロと涙が溢れた。

「ははっ…自分の心配じろよな。本当にお人よしなんだからさあ…」

「君は、転生をするんだよ。別世界にね。君の世界で『ギルティクラウン』と呼ばれる世界にね」

「ギルティクラウン…まじか！」

あの友達を武器に戦つ青年と歌つ少女が戦つ世界か？

「うむ。そうじゃ」

「でも俺絶対死ぬよな。あんな戦闘してたらいつの間にか死んでそ

「大丈夫じゃ願いを三つ叶えよう」

三本の指を立てた神様がニッコリ笑った。神様が楽しそうだ。

「えへっと

運動神経MAX

射撃能力MAX

世界の知識

くらいかな」

「わかったのじや」

「ありがとう」

神様は、微笑んだ。

「君の両親と妹さんは、いい人じやつたのう。君を愛していた。」

ユーリは、ニシッコリ笑って

「最高の家族だつたよ。死んでも迷惑かけちゃつたな。」

その顔は、かつこよさで言えばかなりのイケメンだつた。これが本当のユーリの笑顔だつた。

「俺つてあつちの世界じやぢづなつてんの?」

「あるマンションの一室にいるはずじやそのつち君には、やはり困

難が訪れるはずじゃちなみには親は、いない

「うん……知つてゐる。あの家族以外に家族作る氣も無い……」

「すまんな」

ユーリは、首を横に降つて否定した。

「いや、むしろ礼を言わないといけないんだ。」

「そもそも始めるかのう……」

「ああ」

「最後にサービスじや。欲しい銃は、在るかのう？」

原作知識と世界の知識があるはずじゃ無かつたつけ?

「メイドインゴッサムで奴じや。」

「なるほど…口径がかなり大きく連射できる拳銃をお願いします。」

「ほい」

ガシャンと音を立てて地面に拳銃が落ちた。

シルバーのメックに一つの翼が掘られたマークの銃で銃口は、かなり大きく自動拳銃だ。手にしつくりと来る。

「名前は、『天誅』かな?」

「安易じやな」

「いいじやないですか！」

「ちなみに銃の威力は、一発でビルが吹き飛ぶ。」

「ぶつ……」

「まあ気にせず転生の儀式に入る。」

ギギギギッ！バン！

古い扉を開けたような鈍い音が響き

ユーリの転生は、終了した。

転生の前（後書き）

いのり 声良い

最初からテロ組織（前書き）

ね
み
い
い
い

最初からテロ組織

「んっ？」

どうやら無事に付いたようだ。凄く身体が軽い。

気付くと綺麗な白いベッドで寝ていた。

外の街中には、戦車やらなんやらと普通なら見れない兵器があった。

「遂に来たか。ギルティクラウン！」

脳みそに気持ち悪いくらい知識が入っていて気持ち悪い

「んっ何で頭に包帯？ん～何か変な記憶がある？」

ガチャ！

玄関の扉が開いた音がして反射的に『天誅』を向けた。

その人物は、

「いのり？」

「ん？ もうしたの……… ノーリ？」

原作のヒロインの『いのり』だった。

「何でビックリして？ 僕つて何だ？」

「ノーリは、…………覚えてないの……？」

いのりは、少し悲しい顔をした。

「ノーリは、…………葬儀社の一人だよ？」

葬儀社つて

いのりとかガイとかがいる。あのテロ組織に分類される組織の事か
？どうなってんだ。

ん~つと悩んでいると「大丈夫？」と顔がくつつきやうなくらい近づいてきた。

「…………」

ユーリは、見とれていた。いのりの肌は、雪のよひに白く凄く顔が
綺麗だった。

そして原作通りの服装がまた男の皿には、かなり毒である。

「うわっ…」と思わずカエルのようになに飛んでしまった。

「いつも言つてるだら服装は、露出少なくしろ…『いつも…』

「ユーリは、…………記憶喪失？」

「たぶん…？」

これは、何だ？転生と言つより憑依に近い状態じゃなくないか？どうして葬儀社にいるかさっぱりわからない。

何でだらつか？

「ガイに…連絡する。」

いのりは、あの原作で見たケータイのような物を取り出した。

「いのり待つて！」

いのりは、二つを向いて「何で」と言つた。

「今つて凄く大切な時期だつたりするだろ？何となくわかるんだ。だから心配かけたくない。だから一人の内緒にしてくれないか？」

「ユーリは、…………ガイの次に偉い…………」

「まじかよ…」

「じゃあガイにだけなら」

「……わかった」

ケータイのような物が√字になりそこから空中ディスプレイが現れる。

『どうしたいの？』

そこには、原作通りのガイの姿があった。
葬儀社の制服？のような物を着てディスプレイを見ていた。

「実は、……ユーリが記憶喪失してるの。」

「…本当か？」

原作では、見せない顔をガイは、していた。
「今そこにユーリは、いるか？」

一瞬で元の表情に戻りガイは、ユーリの居場所を聞いた。

「ここに居るよ。」

いのりが√字のケータイ機器受け取り自分の前に持つてきた。

「……」

「……」

「なんと話していいのやらわからなくなり」「俺ってだれですか?」と
聞いた。

ガイは、額に手を置いて

「ホントにコーリは、いのりには、甘いな」

「??」

さつぱり意味がわからなかつた。

何故そこでいのりの名前が出てきた。

「お前の怪我の原因は、いのりを庇つて撃たれた事だ……」

「それは、いけない」と?..

思わず聞いてしまつた。

「昔から言つてこるが自分の価値を間違えるな

「命は、平等だと俺は、思ひ」

ガイは、溜息をついて「コーリは、記憶喪失してゐるのか?」と聞い
てきた。

「…たぶん

「明日でいいから一度、葬儀社に戻つてこい」

「」～解り

「ふん。『記憶を無くしても返事は、変わらんな』

ブツンといい音がしてケータイがしまった。

「…………怒つてゐる？」

「んつ何を？」

「のりが何故落ち込んでいるかさっぱりわからなーい。

「私の……//スで記憶を無くした」と……」

「…………そあ？」

味気なく返した。何も考えず返したわけじゃない。ただ俺は、忘れた。と言つた。

「うと……ありがとう」

「さあなんの事？」

「ハア～俺は、なにせつてんだろ」「
転生一発めから厄介な事になつた。

「ユーリ…お腹減った。」

「グキューーーと女の子らしくない大きさの音に思わず微笑んだ。

「何か作るよ」

「うん……」

リビングの冷蔵庫には、米とちょっとの具材程度だった。

「おにぎりかな…いのり手伝える。」

「教えて…」

「わかった。まず水を手につけて拳大の量の米をとつて塩掛けながら具を入れて完成。」

「熱っ…」

「そりゃあ炊きたてですから…赤くなつてゐる。」

「ちゃんと水を付けて握らないと火傷するからね」

いのりの手を引いて水道水を火傷した指に出した。

何とか二十個くらいのおにぎりを作りほとんどのり食べた。

「寝室に戻るから何かあつたら呼んでな。」

「んっ…わかつたお休み」

「ほい。お休み」

寝室に入りまだ眠かったのかクラッと眠気が現れた。

明日からしなりそうだ。

現在6時になりユーリは、目を覚ました。

んつ何かやわらかい

「んつ…」

と妙に艶やかな声が聞こえた。

何か妙に嫌な予感がして変に盛り上がった部分の布団をめぐると

「なつななな！」

予想通りだがいのりが布団にいた。

「あつ… ゴーリおはよつ」

「…………」

いやいや何でこんな俺の隣で寝るんだろうか？原作では、ガイにベタベタだつたはずだ。

「今日… 葬儀社行かないと…」

ハア～現実逃避は、止めよう頭が痛くなる。いのりは、そのまま外に行こうとしていた。

「いのり寝癖くらい直せ」

「大丈夫」

「いや、全然ダメだから」

いのりの髪の毛を解かしいろいろ加えて完成だ。

「よし行くか」

「付いてきて」

いのりは、路地から道に入り『汚染区域侵入禁止』と描いた看板付きのロープを潜り死人のような田をした人間がいた。

「待ち合わせは、広場だがらこつなはず…」

「おいおー」さん

「キヤハハハナンパだナンパ」

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

三人の不潔な男が口々に何か言つていた。

ヨーリは、思った。肩慣らし程度にはなると考えた。始めは、神様から貰った運動神経MAXを試す。

足に地面を食い込ませ地面を蹴るといつの間にか真横にいた。既に人外である速度だった。

驚いたのは、汚い男の他にいのりもかなり驚いていた。

とりあえず頬に拳を軽く当てた。それだけで大分後ろにある壁にぶつかっていた。

「兄貴！」

子分が叫ぶがユーリは、無情にも既に拳を振り上げていた。

「もう一人どうする？」

殺意を含んだ微笑みをすると腰を碎かせながら逃げて行つた。

「ゴーリー強くなつてない?

「前の自分がどれだけ強いかわからぬーし」

パツパツパツパツ！

眩しいライトがユーリといのりを照らした。

「よく帰ってきたなユーリ」

「まあ帰つてきたよ。ガイ」

オオッ！！

と男達は、吠え上がった。

「よく帰つてきたな！！！」

「怪我ねえか？」

「ぼーっとしてどうしたんだ？」

あまりの感激ぶりに固まってしまった。

「二人は、休め

ガイは、短く言った。明らかボロが出そうだった。

最初からテロ組織（後書き）

バタンツキュー

始まり（前書き）

疲れた（、 、 ）

始まり

燃え盛る建物が体のアドレナリンを促進させる。何とも恐ろしい光景だった。

一個人の人間が兵器に勝利すると言つ結果が彼の強さを証明していた。

度重なる戦闘で「コードは、黒く刀は、どす黒い色をしている。建物は、炭化して当たりには、鉄屑が散っていた。日本刀【黒燕】は、鉄を斬ることも容易く切り裂く可能にしていた。今日の空は、朱い真っ赤だ。

遠くからモーターの回る音とローラーの回転の音がした。

バンッ！

巨大な鉛玉が発射される音がした。それは、反射的に出された刀に切り裂かれたが次は、三発のミサイルが飛来してきた。バックステップで一つのミサイルを回避して一つのミサイルを日本刀で真っ二つにする。

『なつ！？』

謎の音声が流れて驚いているのが分かる。何か聞いた事のある声の気がした。一瞬風が強くなりフードが脱げる。

『……』

急に大人しくなりゅうくり銃口を下ろした。

『貴方……コモウ?』

「んつアヤセか?」

『生きてたの!?』

「話は、後だ……来るぞ!—!」

ギャリリリリ!

鉄の擦れる音を出しながら敵の機体がアヤセ機体に突撃する。

『うつ…』

この機体は、ダイレクトで搭乗者と繋がっていて機体に損傷があると搭乗者もダメージを受けるシステムらしい学校で習つた。

俺は、アヤセの機体を踏み台に弱點と思われる頭部のコードを刀で斬つた。人間にしたら首の頸動脈である場所を無情に切り裂いた。

茶色やら黒やらの液体ががコードから溢れ出し搭乗者の悲鳴を残して機能を停止した。

『ありがとう次行がないと…』

『機体の損傷が多くある。撤退し!』

『でも…』

「冷静な判断をしろ。今の状態で機体を壊すわけには、行かないだろ?」

『……分かつた。撤退する。』

「その前にいのりが近くに居るはず何だが見てないか?」

「いのり?分かつたツグミに云々とく

アヤセの機体を見送り次の軍隊の密集地区に走った。

Sideアヤセ

一年前に彼は、死んだはずだった。細胞兵器の奪取のデータ集めの時に単独潜入でデータを送ったのち死亡。とツグミのハッキングで判明していた。GHQの高いレベルの機密『ボイドゲノム』と呼ばれる兵器の時だ。

彼は、優しい。それは、葬儀社で一番と言つて言いくらいのお人よしだった。一年前だつて任務の日にもいつも通り笑っていたがたまに寂しそうな表情をしていた。だが部屋で盗み見た彼は、人間なんかわからないくらい怖かった。刀と言うアンティークと呼ばれるくらい古い刃物を使う少年。「頼むよ母さん……」この言葉に少なからず私は、驚いた。彼の弱った姿を見るのは、初めてだからだ。

彼だつて死にたくないだろ?……

そして次の日に彼は、居なかつた。

それから一年が立ち私は、この子（機密）を使って戦場を駆けていた。そして出願許可が出て何時間立つたかわからなくなつた頃に黒い格好の人人が現れた。

腰には、刀。様子見に銃を一発撃つと避けることをせずに弾丸を切り裂いた。

「くらえっ！」

背後のミサイルを開いて三発のミサイルを放つた。それをバックステップで避けると刀を使いミサイルを切り裂いていた。

私は、驚いて声が出た。すると黒いフードが外れて素顔が現れた。その人は、誰よりも優しく誰よりも強い少年だつた。

Side Out

Side シュウ

葬儀社に行って事情を話していると、「敵襲だ！」全員が銃を持ち応戦に行く。

何も出来ない…どうすればいいんだ。やれることは、「シュウ…！ 今度こそ守つて見せる！」

そうだ。やりないと変わらない。『自分らしくないことをやるんだ』僕は、走り出した。

Side Out

いのりの車は、ミサイルの直撃でひっくり返っていた。運が良いのだろう手の拘束具を外して目隠しを取ると真っ赤な空が彼女を照らしていた。

全体を見渡す為に瓦礫を上ると

二体の大型の機体がいた。二体の機体の一體が気づいた。

力チャ

銃口がこちらを向いて引き金に指が掛かる

「いのりー！」

そこにリョウが来た。今、会いたかった人が走つて来る。

間に合わない。どちらかが死ぬ。死ぬなら立場的には、わたしだ。だが彼は、私を庇つた。何年立つても変わらない。

始まり（後書き）

頑張る（ ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946y/>

アニメ転生『ギルティクラウン』

2011年12月1日20時54分発行